

ラグビーを象徴する一枚の絵の価値

ラグビーを楽しむに当たって何が大事かという話は、「危機にある文化遺産 対策と共通するところがあります。この問題の元になるのはそれらに対する価値観であって、文化財に全く価値を見いだしていない人にとっては、それは無用の長物であり保存どころか破壊することに抵抗を感じないのである。

文化財が危うく散逸を免れた例から学ぶところがあります。京都の冷泉家の文化財が国宝を含めて戦後も長く顧みられなかった経緯について、冷泉家縁の人から聞いた話です。戦後長らく食料不足で生きる為に食べるのが精一杯で、家屋は辛うじて雨露を凌げるだけで、荒れ放題の惨状と悲哀をものがたっていました。昔の公家の生活から宮中の行事を知り、和歌の歴史から文化発信の核でもあったきわめて貴重な資料資産が、世間から忘れ去られてお倉に眠ったままでした。戦後食料難の時代に文化財を所蔵していた個人や寺社などが生きる糧としてそれらを二束三文で売って現金を得たということです。それらの多くが外国へ渡りました。それでは何故冷泉家では残ったのかというと、冷泉家は売らなかったからであり、売れなかったからです。文化財の入っている御倉は神様の社であって、扉を開けば罰が当たると代々厳しく言い継がれてきたので、扉を開いて売れなかったのです。現実を超越した信仰があったからです。信仰も理念もなく売り払われた過去を反省されなければならない話です。文化財の価値観が変わった今日では御倉や建物は国宝を初め宝物で一杯です。良くぞ残ったものと感心するとともに、冷泉家の信仰が遺産を残したという事実に興味深いものがあります。

さて、課題はラグビーの良さを再発見し、identityについての価値の確認とそれを継承する事です。RFU では研究し普及を図る laboratory を設け推進しています。後進国として安住することなく、研究所活動に習い、人間の知恵を働かせて、価値観を確定することからビジョンを持って、power を楽しさの要素として認める中で、身体の大い者だけの、乱暴者が力を発散し、勝ち負けを争うだけのスポーツになることを恐れ、勝利至上主義を唯一絶対視から離れねばなりません。平等公平でスポーツマンシップを大切に、good, bright, interesting なラグビーの価値を認識し、この遺産の価値を再発見して大切にすることがラグビー遺産を残すことになるのです。その時、ルールに書かれている競技の精神と、名前は ENJOYMENT であるという理念を symbol : 象徴するこの一枚の絵が指針となるものです。この絵は宝物 treasure として、最高の価値を認めて高く掲げて保存されています。ラグビーを愛する心の拠り所として、誕生の証拠の有無という問題を超えて、信仰的要素をもって大切にされ保存され続けていくでしょう。



1880年に描かれた“Football will he do it”という題の絵。エリス少年がボールを持って走った劇的瞬間はこのようであったろうというもので、1983年にRFUのものとなり、貴重な絵としてRFUに飾られています。